様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１３日現在

機関番号：24701
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号： 22592608
研究課題名（和文）過疎高齢化集落における高齢者の孤立や孤独死の防止に有効なモデルの構築
研究課題名（英文）Intervention model building effective in elderly people’s isolation and the prevention of solitary death in a depopulated aging colony
研究代表者
水主　千鶴子　(SUISHU CHIZUKO)
和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授
研究者番号：３０３３１８０４

研究成果の概要（和文）：
本研究は、過疎高齢化集落における学生の介入の効果を検討することを目的として実施された。集落の一人暮らしの高齢者 43 名を無作為に介入群 14 名、非介入群 16 名に割り付けた。介入群の高齢者は学生と密な交流をもった。その結果、高齢者の認知機能が上昇し、高齢者同士の交流が活発になった。学生による介入は、高齢者の孤立や孤独死の防止につながった可能性があることが示唆された。
研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to describe the intervention effect by college students in a depopulated aging colony.
Consenting to participate was a convenience sample of 43 elderly people living alone from the colony randomly assigned to the intervention (n=14)or control group(n=16). The elderly people of the intervention group had many exchange with college students.
As a result, the cognitive function of the elderly people of an intervention group who had exchange with college student went up, and the exchange of elderly people and elderly people became active.
Our intervention by college students has the possibility for prevention elder’s isolation and solitary death , and improved cognitive function in elderly people.
交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	900,000	300,000	1,200,000
２０１２年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	990,000	4,190,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学　地域・老年看護学
キーワード：過疎高齢化集落　高齢者　孤立　孤独死

１．研究開始当初の背景
日本の過疎地域は国土の半分を占め、全人口の１割が過疎地域で暮らしている。過疎地域は、豊かな自然や特有な伝統や文化があり、地球環境を守る森林や農地が多く存在し、食料や水を都市に供給している。過疎地域は、人口の減少や少子・高齢化により小規模・高齢化集落が増加している。過疎化は、人口の減少や少子・高齢化という問題だけではなく、農林漁業の低迷や地域に特有な伝統や文化の衰退という問題、さらには森林の荒廃や耕作放棄地の増大に伴う自然環境・景観の破壊といった問題を引き起こしている。このような時局において、国および地方自治体が実施

する過疎化対策事業は、ハード面やソフト面の両面から過疎地域の自立促進や地域の振興、地域の活性化を目指す幅広く総合的な事業である。過疎地域の交通通信の整備や地域の生活環境の整備といったハード面は進展している。しかし、高齢者の保健・福祉分野や地域の自立的な発展と活性化に関するソフト面は数多くの課題を抱えた状況にある。過疎地域の人口減少に伴い、生活扶助機能の低下やバスなど交通機関の減少が起きている。また、廃屋の増加や耕作を放棄した田畑の増加、鳥獣による被害など生活の安心・安全に関わる問題がより深刻になってきている。このような問題を解決するために、高齢者の生活基盤の維持や生活の確保といったハード面の対策事業はすすんできている。過疎地域の高齢者が死を迎える日まで安心・安全に生活ができる持続的な支援を提示することが必要である。今こそ、過疎高齢化集落の高齢者の孤立や孤独死を防止するためにはどうすればよいのか、そこでの生活をどのように支えていくべきなのかという課題に取り組まなければならない時である。

国内においては、過疎山村の高齢者の居住環境整備に関する研究や過疎社会における交通手段の確保に関する研究といった環境面の研究が多い。しかし、過疎高齢化集落における高齢者の終末期ケアの構築についての研究は、Ｌモード電話機を用いた安否確認システムやテレビ電話を効果的に活用した地域見守りなどの研究は行われているが、人的資源による安心・安全な生活の形成についての研究は少ない。

２．研究の目的

過疎高齢化集落の高齢者の孤立や孤独死の現状と問題点を実態調査によって把握するとともに、過疎高齢化集落の高齢者の孤立や孤独死を防止するにはどのような支援が必要かを検討する。具体的には、１）過疎高齢化集落の一人暮らしの高齢者の孤立や孤独死の現状について調査を行う、２）過疎高齢化集落の一人暮らしの高齢者の孤立や孤独死の防止にはどのような人的資源が必要であるのかを調査によって明らかにする、３）大学生との人的交流が、高齢者の孤立や孤独死の防止にどのような影響を与えているかを調査する。実態調査で明らかにされた内容をもとに、過疎高齢化集落の安心・安全に寄与すると考えられる介入を一定期間実施することで、過疎高齢化集落における高齢者の孤立や孤独死の防止に有効な介入モデルを構築することを目的とする。

３．研究の方法

過疎高齢化集落に居住する一人暮らしの高齢者のうち、研究への参加を希望する者を研究の対象者とする。倫理審査承認日以降に、３年間にわたり、本学部生が健康診断や村祭り、交流会など対象者と年３回程度の交流をもつ。それらの交流以外に、介入群の高齢者に対して、学生は健康支援や生活支援（家事や農作業の手伝い、話し相手等)、文通など個人単位で行い、年に複数回の交流をもつ。

交流の開始の前に、対象者のパーソナル・ネットワークとソーシャルネットワークについて半構成化面接法による実態調査を実施する。また、学生による介入効果を検証するためのベースラインを得るために、事前測定として、認知機能検査としては、ＭＭＳＥ(Mini-Mental State Examination)を実施する。質問紙調査としては、自立度の指標となる手段的ＡＤＬ(IADL)、改訂ＰＧＣモラール・スケール（主観的幸福感)、抑うつ（老年科うつスケールＧＤＳ15）を用いて実施する。

交流の開始後、対象者に対して、認知機能検査と質問紙調査を１年ごとに経過を追って実施し、評価する。交流を密に行う介入群（n＝14）と定期的な交流を行うだけの非介入群(n＝16)とに分けて分析し、学生による介入効果を検証する。

倫理的配慮：対象者に研究の目的・方法・個人情報の取り扱い、ならびに秘密の保持などについて、文章を用いて説明を行い、署名にて同意を得た。対象者が、途中で研究への参加を拒否しても不利益が生じることはないことを説明した。

４．研究成果

Ａ地区は農村共同体としての互助共助の文化があり、近隣の見守りがあり一人暮らしの高齢者の孤立はなかった。過去 10 年間の孤独死は１件 2011 年（平成 23 年）のみであった。

介入の結果、学生が密に交流を行う介入群の対象者と定期的な交流のみを行う非介入群の対象者のＭＭＳＥの得点を比較すると、非介入群の対象者よりも介入群の対象者の方がやや高くなった。介入群と非介入群の対象者のＩＡＤＬの得点を比較すると、介入群の対象者の方がやや得点が高くなった。介入群と非介入群の対象者のＰＧＣモラール・スケールの得点を比較すると、介入群の対象者よりも非介入群の対象者の方は得点が高くなった。介入群と非介入群の対象者の抑うつについても、介入群の対象者よりも非介入群の方が高くなった。

認知機能については、学生と密に交流をもった介入群の対象者の認知機能が有意に上昇したことから学生との交流が認知機能に影響を与えた可能性が考えられる。学生は一人暮らしの高齢者宅を訪問し、ゆっくりと会話をする機会をもった。一人暮らしの高齢者は家族のことや村の歴史、文化など多くのことを語った。このような時間をもつことが認知機能に何らかの影響を与えた可能性があ

る。
　高齢者のＩＡＤＬ得点は、加齢による時間経過とともに低下する。学生は一人暮らしの高齢者と一緒に家事や耕作地の管理などを行った。学生と密に交流をもった介入群の対象者のＩＡＤＬは有意に上昇したことから、学生との交流が介入群の対象者のＩＡＤＬの得点の低下を緩やかにした可能性が考えられる。
　一般的に一人暮らしの高齢者は主観的幸福感が低く、人生の満足度が低いといわれている。学生と密に交流をもった介入群の対象者の主観的幸福感は、非介入群の高齢者よりも主観的幸福感は低かった。学生との交流は定期的なものであっても、交流後はしばらく交流が途絶えることになる。このことが一人暮らしの高齢者の気分の低下を引き起こした可能性がある。
　抑うつについては、学生と密に交流をもった介入群の高齢者の方が非介入群の高齢者よりも抑うつ状態であることが明らかになった。過疎高齢化集落の一人暮らしの高齢者は、社会的孤立の状態になりやすい。学生が一人暮らしの高齢者と交流をもつことで、高齢者同士の交流が増え、離れて暮らす家族との会話の内容が増えたという。学生が一人暮らしの高齢者と３年間関わりをもったことは、地域における社会的ネットワークを活性化させた可能性がある。今後とも継続的に学生との交流を行い、一人暮らしの高齢者の孤立状態を回避することが抑うつ状態の改善につながると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計２件）
① 石谷朋子、服部園美、<u>水主千鶴子</u>
　女性の独居高齢者の孤独・孤立防止に効果的な支援方法の検討
　日本老年看護学会第 17 回学術集会　金沢　2012 年７月
② <u>水主千鶴子</u>、<u>有田幹雄</u>、<u>上松右二</u>、<u>内海みよ子</u>、<u>岩原昭彦</u>
　過疎高齢化集落における高齢者の孤立や孤独死の防止に有効な介入モデルの構築
　日本老年看護学会第 16 回学術集会　東京　2011 年６月

〔その他〕
ホームページ等
　2012 年（平成 24 年）５月 24 日の朝日新聞朝刊に「過疎地の一人暮らし高齢者の孤立を防ぐモデル」という見出しで掲載される。

６．研究組織
(1)研究代表者
　水主　千鶴子（CHIZUKO SUISHU）
　和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授
　研究者番号：30331804

(2)研究分担者
　有田　幹雄　（ARITA　MIKIO）
　和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授
　研究者番号：40168018
　上松　右二　（ UEMATSU　YUJI ）
　和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授
　研究者番号：90223502
　内海　みよ子　（UTUMI　MIYOKO）
　和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授
　研究者番号：00232877
　岩原　昭彦　（IWAHARA　AKIHIKO）
　和歌山県立医科大学・保健看護学部・准教授
　研究者番号：23730620
(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：